

L. ティークにおけるジークフリート伝説

—— 二つのロマンツェ ——

石 川 栄 作

》Siegfrieds Jugend《 und 》Siegfried der Drachentöter《
von Ludwig Tieck

Eisaku ISHIKAWA

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 0916-4847

第4巻 別刷 1997年2月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

The Faculty of Integrated Arts and Sciences

The University of Tokushima

Volume IV, February 1997

L. ティークにおけるジークフリート伝説

——二つのロマンツェ——

石 川 栄 作

》Siegfrieds Jugend《 und 》Siegfried der Drachentöter《
von Ludwig Tieck

Eisaku ISHIKAWA

Abstract

Bei der Wiederentdeckung des Nibelungenlieds, das seit langem fast völlig in Vergessenheit geraten war, spielten die Romantiker des 19. Jahrhunderts eine wichtige Rolle. Dazu viel trug vor allem Ludwig TIECK (1773-1853) bei, der außer einigen Erwähnungen des Nibelungenlieds 1804 auch zwei Romanzen 》Siegfrieds Jugend《 und 》Siegfried der Drachentöter《 dichtete. In der vorliegenden Arbeit sollen die beiden Siegfriedballaden behandelt werden, um deren Eigenheiten klarzumachen.

》Siegfrieds Jugend《 besteht aus drei Abschnitten: Siegfried beim Schmied (1-9), Drachenkampf (10-15) und Mimers Totschlag (16-21). Die im ersten Abschnitt behandelte Episode stammt zwar aus den ältesten Sagenstoffen, aber solche seltenen Schilderungen wie Siegfrieds Entlaufen aus der väterlichen Burg aus Trotz und sein Eintreten beim Waldschmied sind erst im Hürnen Seyfrid des 16. Jahrhunderts zu finden. Daraus schließt man, daß der Dichter als Stoffe das Lied vom Hürnen Seyfrid benutzt hat. Andererseits ist zu folgern, daß er wahrscheinlich auch auf die nordische Thidrekssaga zurückgegriffen hat, weil die Episoden im zweiten Abschnitt, Drachenkampf mit den Baumzweigen und besonders das Essen nach dem Kampf, auf gleichartige Szenen in der Thidrekssaga hinweisen. Eine noch engere Beziehung zwischen den beiden Werken findet man auch in der Episode von Mimers Totschlag des dritten Abschnitts, die nicht im Hürnen Seyfrid, sondern in der Thidrekssaga zu lesen ist. So hat L. TIECK mit einigen Materialien sein Gedicht geschaffen, das

aber nur die traditionellen Siegfriedsüberlieferungen beibehält und noch nicht die Charakteristik als seine Romanze zeigt.

»Siegfried der Drachentöter« besteht gleichfalls aus drei Abschnitten: Siegfried beim Schmied (1-17), Drachenkampf (18-37) und Stimme der Vögel (38-58). Der erste und der zweite Abschnitt führen dieselben Episoden wie der erste und der zweite des oben erwähnten Gedichts weiter aus. Der Dichter entwickelt aber dabei sehr geschickt und wirkungsvoll die Naturschilderungen des Waldes, was sein Gedicht als Romanze charakterisiert. Die Charakteristik der Tieckschen Romanze zeigt sich jedoch am deutlichsten in der neuen Episode des dritten Abschnitts. Die Episode stammt zwar aus den nordischen Überlieferungen, aber Siegfrieds Verstehen der Vögelstimmen wird in diesem Gedicht nicht als Folge der Berührung des Drachenbluts mit seiner Zunge behandelt. Dort herrscht eine romantische Atmosphäre: »Siegfried fühlte, er sei im süßen Traum« (40. Str.), und zwar »Siegfried im Herzen fühlte, daß er den Ton (der Vögel) verstand« (43. Str.). Die Episode von den Vögelstimmen behandelt zwar die traditionellen Überlieferungen wie »Mimers Tücke«, »das Gold in der Höhle« und »die hörnige Haut«, aber der Dichter charakterisiert dabei durch die farbigen Naturschilderungen sein eigenes Gedicht als Romanze. Die romanzenartige Episode von den Vögelstimmen hat höchstwahrscheinlich auf Richard WAGNER eingewirkt, der später im zweiten Akt seines Musikdramas »Siegfried« die Romantik des Waldes entwickelt hat. So hat L. TIECK sicherlich bei den Siegfriedsüberlieferungen eine große und wichtige Rolle gespielt.

I. ニーベルンゲン伝説の復活とロマン主義

ニーベルンゲン伝説は五、六世紀の民族大移動時代にライン河畔フランケン
の領土を発祥地として、最初は歌謡の形式で生まれたものであり、その後数世
紀にわたってさまざまな変遷を経たのち、十三世紀初頭にはドーナウ河地方の
一詩人による英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の成立によって、ひとまずそ
の定着を見たと言ってよいであろう。十二世紀末期から十三世紀初期に至る約
五十年間(1180-1230)¹⁾ は、ホーエンシュタウフェン王朝の隆盛の下で騎士文
学が見事な花を咲かせた時期であり、ドイツ文学史上最初の興隆期とも言われ
ている。ハルトマン・フォン・アウエ、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバ
ッハ及びゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの三大叙事詩人の宮廷
叙事詩とともに、この英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』もその当時特に好ん
で騎士階級の人々に受け入れられていったことは、その写本が現在でも数多く
遺されている²⁾ ことから容易に窺い知ることができよう。

ところが、中世後期になると、騎士文化の凋落とともにこの英雄叙事詩『ニ
ーベルンゲンの歌』も次第に人々から忘れられていった。確かに十六世紀には
韻文『不死身のザイフリート』³⁾ やハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリ
ート』(1557年)⁴⁾ を通じて、また十七・十八世紀には民衆本『不死身のジーク
フリート』⁵⁾ によってニーベルンゲン伝説は騎士階級から市民階級の人々へと
伝承され、完全に忘れ去られたわけではなかったが、しかし、その頃にはニ
ーベルンゲン伝説そのものはもはや伝統的な英雄主義的な精神を彷彿させること
なく、亜流的な内容へと墮していったことを認めざるをえない。そこにはもは
や英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の面影はなく、英雄主義的精神の形骸化

-
- 1) この時代区分はフリードリヒ・マウラーに依る。Vgl. Friedrich MAURER: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954. S.5.
 - 2) 今日までに『ニーベルンゲンの歌』の写本は、完本・断片を合わせると、三十数種類の写本が発見されている。Vgl. Michael S. BATTIS(Hrsg.): Das Nibelungenlied. Paralleldruck der Handschriften A, B, und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1971. S.801-810.
 - 3) 拙稿:『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質 徳島大学教養部紀要(外国語・外国文学)第4巻1993年参照。
 - 4) 拙稿:ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』 徳島大学総合科学部紀要「言語文化研究」第2巻1995年参照。
 - 5) 拙稿:『不死身のジークフリートの素晴らしき物語』——韻文から民衆本へ——伊藤利男先生退官記念ドイツ文学・語学論集「ロゴスとポエジー」1995年参照。

されたニーベルンゲン伝説がわずかに遺されていたに過ぎなかったのである。その上さらに1618年に勃発した三十年戦争はドイツ文化に全面的な荒廃をもたらし、ドイツ民族にとって貴重な古文献や諸種の伝説は長い間埋もれたままになり、長く不毛の時代が続く結果となったのである。

そのような状況下で『ニーベルンゲンの歌』が再発見されるに至るのは十八世紀後半になってからのことで、それに貢献したのがチューリヒのボードマー (Johann Jacob BODMER, 1698-1783) である。中世文学に深い関心を抱いていたこのボードマーの勧めで、リングウの若い医師オーベライト (Jacob Hermann OBEREIT, 1725-98) が1755年にフォーアアルルベルクのホーエンエムス伯爵家の図書館を訪れ、そこで『ニーベルンゲンの歌』の写本を発見したのである。これがのちに写本Cと呼ばれる写本である⁶⁾が、これを皮切りに1769年には写本Bがザンクト・ガレンにおいて、また1779年には写本Aがホーエンエムス伯爵家において発見されるなど、その後も数々の写本が発見されることとなるのである。ともかくオーベライトからこの最初の写本発見の報告を受けたボードマーは、1757年に『ニーベルンゲンの歌』の最初のテキストを刊行したが、しかし、大きな反響を見るには至らなかった。当時のドイツはまだ外国文化への追従時代であり、自国固有の作品の価値を尊重すべき基礎ができていなかったためである。ボードマーと同様にチューリヒ出身であったミュラー (Christoph Heinrich MYLLER, 1740-1807) が1782年に『ニーベルンゲンの歌』の最初の完本を刊行したときも同様である。ミュラーはこれをプロイセンのフリードリヒ大王 (Friedrich der Große, 在位1740-86) に献呈したが、大王はその刊行者にあてた手紙 (1784年2月22日付) の中で、この中世の作品を軽蔑して、「一文の価値もなく、過去の塵の中から掘り出される価値もない、大変そまつな物」と評した⁷⁾ことはあまりにも有名である。

このように当初はあまり注目されなかった『ニーベルンゲンの歌』がその後

6) 『ニーベルンゲンの歌』の写本にアルファベットを用いて表示したのは、カール・ラッハマン (Vgl. Karl LACHMANN: Der Nibelunge Noth und die Klage. 1826) である。その際彼は十三、十四世紀の古い羊皮紙の写本には大文字のアルファベットを用い、十五、十六世紀の新しい羊皮紙及び紙の写本には小文字のアルファベットを用いて表示した。この表示の仕方が今日でも用いられていることは周知の通りである。

7) Vgl. Werner WUNDERLICH: Der Schatz des Drachentödtters. Ernst Klett Verlag Stuttgart 1977. S. 10. 及び相良守峯: ドイツ中世叙事詩研究 郁文堂1960年86頁参照。

広く人々に受け容れられるようになったきっかけとしては、ヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダー (Johann Gottfried von HERDER, 1744-1803) の影響が挙げられる。自国固有の民族精神や伝統の価値を認識すべき基礎ができていなかった当時であって、民族の伝統に眼をひらき、自然の声に耳を傾けることを教えたこのヘルダーの影響によって、ロマン主義の人々が祖国の古い中世文学に傾倒し始めたのである⁸⁾。まずルートヴィヒ・ティーク (Ludwig TIECK, 1773-1853) は、友人ヴィルヘルム・ハインリヒ・ヴァッケンローダー (Wilhelm Heinrich WACKENRODER, 1773-98) とともに中世の本来の再発見者であると言われているが、1803年には『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』(Minnelieder aus dem schwäbischen Zeitalter) を出版し、この中の序論で『ニーベルンゲンの歌』にも触れている。翌1804年には彼は『若き日のジークフリート』(Siegfrieds Jugend) 及び『竜殺しのジークフリート』(Siegfried der Drachentöter) という二つのバラード風の詩(ロマンツェ)を書いており、さらにのちには『ニーベルンゲン族の歌』(Das Lied der Nibelungen) の翻訳も試みている⁹⁾。グリム兄弟——ヤーコプ・グリム (Jacob GRIMM, 1785-1863) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm GRIMM, 1786-1859) ——はこのティークの、特に最初に挙げた1803年の著書の序論に大きな影響を受け、中世文学研究にも専念して、数多くの論文を書いてゆくのである。『ニーベルンゲンの歌』に関する論文としては、兄のヤーコプ・グリムには『ニーベルンゲンの歌について』(Über das Nibelungen liet.1807)¹⁰⁾をはじめとして、1835年の『ドイツ神話』(Deutsche Mythologie) などがあり、また弟のヴィルヘルム・グリムには『フォン・デア・ハーゲンによる刊行のニーベルンゲンの歌』(Der Nibelungen Lied, herausgegeben durch Friedrich Heinrich von der Hagen. 1808)¹¹⁾をはじめとして、『古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について』(Über die Entstehung der altdeutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der Nordischen. 1808)¹²⁾や1829年の『ドイツ英雄伝説』(Deutsche Heldensage) などがある。ちなみに、1813年に生まれたりヒャルト・ヴァーグナー (Richard WAGNER, 1813-83) がやがて

8) 相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究 郁文堂1960年87頁参照。

9) Vgl. W. WUNDERLICH: a.a.O., S.13.

10) 谷口幸男：ゲルマン文献学の生成——若きグリム兄弟の足跡——(『現代に生きるグリム』所収 岩波書店1985年) 22-24頁参照。

11) 谷口幸男：前掲書 24-26頁参照。

12) 谷口幸男訳：『古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について』(ドイツ・ロマン派全集第15巻「グリム兄弟」所収 国書刊行会1989年 275-339頁)

『エッダ』や『ニーベルンゲンの歌』を知ることになるのも、上記の兄ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話』を読んでからであり¹³⁾、このヴァーグナーによってニーベルンゲン伝説はその後さらにその名を後世に伝えてゆく結果となるのである。

このように『ニーベルンゲンの歌』が広く受け容れられるようになった第一の動機が、ロマン主義運動であるならば、第二の動機として政治的事情も挙げられよう¹⁴⁾。代々皇帝の冠を戴いてきたオーストリアも、また新興国プロイセンも、ナポレオンの率いるフランス軍の侵入によってその力を弱められ、ついに1806年にはドイツ国民の神聖ローマ帝国も解体していったが、そのまさに政治的衰退の時代に、ドイツ民族思想、ドイツ愛国心が生まれ、これが古ドイツ文学に従事するのを助長したのである。殊に『ニーベルンゲンの歌』はドイツ民族的叙事詩として以前よりももっと広い関心を見出した。このわずか数十年のうちにこの作品の評価について生じた変遷を如実に物語っているのは、新設のベルリン大学地理学教授で、『ニーベルンゲンの歌』の講義をも担当したヨハン・アウグスト・ツォイネ (Johann August ZEUNE, 1778-1853) がドイツ自由戦争の時代に、——すなわち1815年、連合軍がエルバ島から立ち帰ったナポレオンを迎え討とうとしている矢先に——『ニーベルンゲンの歌』の戦陣版 (Feld- und Zeltausgabe) を出版した¹⁵⁾ ということである。多くの若者たちは『ニーベルンゲンの歌』をナポレオンとの戦いに持って行くことを欲したのである。

こうしていくつかの動機から中世文学への関心が高まっていったのであるが、この時期に最も大きな熱意と最も強力な学問的野望とを持って『ニーベルンゲンの歌』研究に尽力した人物は、フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン (Friedrich Heinrich von der HAGEN, 1780-1856) である。1802-3年にヴィルヘルム・シュレーゲル (Wilhelm SCHLEGEL 1767-1845) がベルリンで行なった中世文学の講義を聴いたことのある彼は、『ニーベルンゲンの歌』研究に没頭し、テキストの刊行を何度か企て、1816年の第三版でもって初めてザンクト・ガレン本の完全なテキスト (写本B) を普及させることに成功した。このフォン・デア・ハーゲンのテキスト刊行によって『ニーベルンゲンの歌』との文献学的な取り組みが集中的に始まったのであり、やがてこの文献学的研究はすでに脚註6で述べたカール・ラッハマン (Karl LACHMANN, 1793-1851)

13) ジャン＝クロード・ベルトン (横山一雄訳)：ワーグナーと《指環》四部作 (文庫クセジュ 686) 白水社1987年21頁参照。

14) Vgl. W. HOFFMANN: a.a.O., S. 4f.

15) Vgl. W. HOFFMANN: a.a.O., S. 4f.

などの登場によって活発になってゆくのである。この文献学的研究史については以前にもまとめた¹⁶⁾ ことがあり、ここでは割愛するので、詳細はそれらを参照されたい。

ともかくも上で述べてきたニーベルンゲン伝説の学問的・芸術的な受容は、強い民族的・愛国的感嘆の印象下にあった¹⁷⁾ と言えよう。例えば、マックス・フォン・シェンケンドルフ (Max von SCHENKENDORF, 1783-1817) は『ライン河畔にて』(Am Rhein, 1814) という詩の中で、また M. v. シュトラハヴィッツ (M. v. STRACHWITZ, 1822-47) はソネット『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied, 1842) の中でその民族的愛国心を表現している。カール・ジムロック (Karl SIMROCK, 1802-76) の最初の『ニーベルンゲンの歌』の翻訳(1827)におけるバラード『ニーベルンゲンの財宝』(Der Nibelungen-Hort)、あるいは F. R. ヘルマン (F. R. HERMANN, 1787-1823) のドラマ『ニーベルンゲン』(Die Nibelungen, 1819) の献辞もまた、ド・ラ・モット・フケー (F. de la Motte Fouqué, 1777-1843) のドラマ『北欧の英雄』(Der Held des Norden, 1810) あるいはルートヴィヒ・ウーラント (Ludwig UHLAND, 1787-1862) のバラード『ジークフリートの剣』(Siegfrieds Schwert, 1812) などともニーベルンゲン素材の文学的復活を祝福している。また当時熱心に『ニーベルンゲンの歌』に携わった多くの人々の中には、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von GOETHE, 1749-1832) も属していた¹⁸⁾ ことも見逃してはなるまい。彼は今やこの作品に強く印象づけられ、1808年11月から翌年1月までは「水曜会」の婦人たちにこの叙事詩を朗読し、注釈を施したりしたほどである¹⁹⁾。やがて1827年に K. ジムロックの名訳が世に出たときもゲーテはこれを読み、示唆に富む感想を書き記している²⁰⁾。『ニーベルンゲンの歌』はこうしてロマン主義者たちの間に限らず、多くの詩人の間でも一躍注目を浴びることとなり、翻訳をはじめ、叙事詩的・抒情詩的改作、戯曲、オペラ及び小説など、さまざまな形態で作品化されてゆくのである。

16) 拙稿：ニーベルンゲン研究史と問題点 「かいりす」第28号1991年1-12頁及び拙著：『ニーベルンゲンの歌』——構成と内容——郁文堂1992年1-15頁参照。なお、本稿はこれらと重複する部分も多くあることを付記しておく。

17) Vgl. Werner WUNDERLICH: a.a.O., S.12.

18) Vgl. W. HOFFMANN: a.a.O., S.4f.

19) Vgl. Helmut BERNDT: Die Nibelungen. Auf den Spuren eines sagenhaften Volkes. Bergisch Gladbach 1987. S.32f.

20) Meyers Klassiker-Ausgaben, Goethes Werke. Bd. 26. Das Nibelungenlied. S. 417-9.

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』の復活にロマン主義者たちの果した役割はことのほか大きなものであったと認めなければならないであろう。なかでもティークの果した役割は、グリム兄弟に影響を与えたという意味においてもかなり大きかったと言っても過言ではない。そこで、以下においては実際にティークの二つの詩『若き日のジークフリート』と『竜殺しのジークフリート』を取り上げて、それらの邦訳を試みたのち、それぞれに若干の解説を加えることによって、ティークにおけるニーベルンゲン伝説の特質を探り出すことにしたい。

II. ティーク作『若き日のジークフリート』

この詩のテキストは『ルートヴィヒ・ティーク著作集』第7巻²¹⁾に拠るが、のちの解説の都合上、四行一連の原詩に番号を付けておくほか、便宜的に原詩全体を内容の面から三つの部分に分け、カッコ内に小見出しを付けておく。また、のちの解説のために特に必要な箇所には下線をも付しておく。なお、邦訳は拙訳であるが、二行目と四行目が脚韻を踏む原詩のリズムをそのまま訳文に移すことは不可能であり、邦訳は原詩の大意を示すものと思っていただけたら幸いである。

》Siegfrieds Jugend《 『若き日のジークフリート』

(1. 鍛冶屋でのジークフリート)

In frühen Kindestagen,	幼い少年の頃、
<u>Aus Trutz und frevlem Mut,</u>	<u>わがままな反抗心から</u>
Entlief der Burg zu Santen	腕白少年ジークフリートは
Siegfried, ein Recke gut.	(1) ザンテンの城から旅に出た。
Er kam nach vielem Irren	彼はあちこち放浪したのち、
In einen fernen Wald,	遠く離れた森にやって来た。
Sah da die große Schmiede,	そこで目にした大きな鍛冶場に

21) Ruprecht WIMMER(Hrsg.): Ludwig Tieck, Gedichte. Deutscher Klassiker Verlag Frankfurt am Main 1995. S.377-80.

Eintrat der Knabe bald.

(2) 勇敢な少年は立ち寄った。

Hier wohnt' mit seinen Künsten
Mimer, ein Held bekannt,
Der mit vielen Gehülffen
Schmiedete schön Gewand.

ここに住んでいたのが腕のよい、
有名な英雄ミーメル。

彼は多くの徒弟をかかえていて、

(3) 立派な武具を作っていた。

Er wirkte edle Schwerter,
Panzer und Schilde breit,
Die kauften werte Recken
Und Kön'ge hoch erfreut.

彼が作る高価な剣や
鎧や幅広の楯は、

それらを買い入れる気高い騎士や

(4) 国王を大喜びさせたほど。

Er war ein Held gewaltig,
Zu ihm trat Siegfried ein,
Und wollt' im grünen Walde
Mimers Gehülfe sein.

力の強いその勇士のもとに

ジークフリートは足を踏み入れた。

彼は緑の森の中でミーメルの

(5) 徒弟になろうと思ったのだ。

Als größer ward der Knabe,
Zeigt' er viel bösen Sinn,
Er droht' und plagte alle,
Der Meister furchte ihn:

少年は大きくなると、

いろいろと悪戯をして、

皆を厳したり、苛めたり。

(6) 親方も少年を恐れた。

Er stellt' ihn an die Arbeit
An einem Sommertag,
Da nahm Siegfried den Hammer
Und tat so kräft'gen Schlag,

ある夏の日、親方は

少年を仕事につかせた。

ジークフリートは金槌を持って

(7) 力いっぱい打ちのめすと、

Daß er den Amboß spaltete
Und schulg ihn in den Grund,
Darob sie alle erschranken
Und wünschten zu der Stund,

金敷は壊れて

地面にめり込むほど。

そのため皆は驚き、

(8) その場でこう願った、

Er wäre nie gekommen,
Sie hatten sein nicht not,

奴などに来てほしくなかったと。

彼らは少年をいやがり、

Sie furchten, daß der Große
Sie alle schlug tot.

力強い彼が彼ら皆を
(9) 殺してしまうのではないかと恐れた。

(2. 竜との戦い)

Ein giftiger Linddrache
Dort in dem Walde was,
Vor dessen grimmem Rachen
Der Kühnste nicht genas.

その森の中には
一匹の有毒の竜が棲んでいた。
その狂暴な口から
(10) 逃れた勇士はいなかったほど。

Mimer in seinen Listen
Dachte mit klugem Sinn:
Der Knab' wird sich nicht fristen;
Sandt' ihn zum Wurme hin.

ミーメルが策略を用いて
賢明にも考え出して、
少年を片づけるために、
(11) その竜のもとに彼を遣わせた。

Da folgt der Jüngling kühne
Dem anbefohlenen Werke,
Ohn' Waffen in der Grüne,
Nur in selbsteigner Stärke.

そこで勇敢な少年は
緑の森の中で武器も持たずに、
ただ持ち前の腕力でもって、
(12) 頼まれた仕事に従事する。

Der Drache schoß im Grimme
Aus seiner Höhle wild,
Den jungen Ritter schirmten
Baumzweige wie ein Schild.

竜は激怒して
荒れ果てた洞穴から出て来た。
若き勇士を護ったのが
(13) 楯のような木の枝。

Damit kämpft er so kräftig
Und schlug das Ungeheuer,
Dann aß er in dem Walde
Und zündete ein Feuer,

それでもって少年は激しく戦い、
怪獣を打ちのめした。
それから彼は森の中で食事をし、
(14) 火を起こした。

Im Drachenblut er badete,
Hürnen ward seine Haut,
Kein Waffen ihm nun schadete,
Wie scharf es auf ihn haut.

竜の血を浴びると、
彼の皮膚は角質となった。
鋭く打ったにしても、どんな武器も
(15) 今や少年を傷つけることはできない。

(3. ミーメル殺害)

In sehr grimmigem Mute 大変荒々しい気性で
Riß er vom Wurm das Haupt 少年は竜の頭を斬り落とし、
Und rennt durch Waldesdunkel, 暗い森の中を駆け抜ける。
Als schon der Meister glaubt, (16) 親方はすでに、少年が森の中で

Er sei im Wald erstorben;
Da schreien die Gesellen:
Wir sehen Siegfried kommen,
Der wird uns alle fällen!

死んだものと思っている。
ところが徒弟たちが叫ぶには、
「ジークフリートが戻って来た。
(17) 彼は我々皆を殺してしまうぞ！」

Er trägt das Wurmhaupt blutig	少年は血だらけの竜の頭を
Wie einen Schildesrand!	楯の端 かた のように持っている！
Siegfried trat ein wildmutig,	ジークフリートが乱入すると、
Sie flohn zur Steineswand.	(18) 徒弟たちは岩壁へ逃げ去った。

Mimer ging ihm entgegen,
Er sah des Jünglings Wut
Um Gnade bat der Degen,
Harnisch und Schwerter gut

ミーメルは彼を出迎え、
少年の怒りを見て取ると、
勇ましい鍛冶屋は恵みを乞い、
(19) 鎧や立派な剣を

Versprach er fleh'nd dem Werten: 約束して少年に助命を嘆願する。
Siegfried nichts sagte wieder, ジークフリートは何も言わずに、
Das Haupt warf er zur Erden 竜の頭を地面に投げつけ、
Und schlug den Meister nieder. (20) 親方を打ち倒してしまった。

Auf saß er dann zu Rosse,
Und nahm ein Sturmgewand,
Nicht sucht' er die Genossen,
Weit fuhr er durch das Land.

彼はそれから馬に飛び乗り、
武具を手にして、
もはや徒弟たちを探さずに、
(21) その国から遠くへ去って行った。

以上、カッコ内に小見出しを付しておいたように、詩の全体は内容から見て、1)「鍛冶屋でのジークフリート」、2)「竜との戦い」、3)「ミーメル殺害」の三つに分けられる。これらのエピソードはいずれも長年にわたって語り継がれ

てきたものであるが、それぞれについて従来の伝承と比較することによって、ティークの詩の特質を探り出すことにしよう。

1) 鍛冶屋でのジークフリート

まず第1－9連で取り扱われている「ジークフリートの鍛冶屋奉公」に関するエピソードはかなり古い伝説素材に由来するもので、このエピソードを伝える作品はごくわずかしき遺っていない。北欧伝承に関して言えば、『歌謡エッダ』中の「レギンの歌」と『ヴォルスンガ・サガ』においてはシグルズ（ジークフリート）はレギンという名の人物を養父としてさまざまな教養を積む²²⁾が、鍛冶仕事を教えられた形跡はない。『ティードレクス・サガ』において初めてジグルト（ジークフリート）が鍛冶屋ミーメのもとで鍛冶仕事を試みるエピソードが語られている。しかし、そこではジグルトは——もともとタルルンゲン国のジグムント王とその妃ジジベとの間に生まれた王子であるものの——雌鹿の乳で育ったあと、鍛冶屋ミーメに拾われて成長した腕白少年として登場している²³⁾。ティークの詩第1－2連において語られているようなエピソード、すなわち、腕白少年ジークフリートが「わがままな反抗心から」(aus Trutz und frevlem Mut)父の城を出て、森の中の鍛冶屋にやって来るエピソードが初めて取り上げられているのは、結局のところ、ドイツ伝承の十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』においてである。このエピソードはその後ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』(1557年)や十七・十八世紀の民衆本『不死身のジークフリート』などにおいてかなり忠実に語り継がれているが、ティークが詩作するにあたって主たる素材として用いたのは恐らく十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』であろう。

この韻文『不死身のザイフリート』の中でも主人公の生い立ちから鍛冶屋奉公までのエピソードを取り扱っているのは、冒頭部分(1－15詩節)における最初の5詩節である。その第1－5詩節²⁴⁾が語るところによると、ニーデルラントのジグムント王とその妃との間にはザイフリートという名の王子がいたが、王子はとても腕白で、手に負えなかったので、父王は顧問官たちの進言によって王子を旅立たせることにした。旅に出たザイフリートは森の前の鍛冶屋にや

22) 谷口幸男訳：エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年 133頁、及び菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会1979年36頁参照。

23) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): Geschichte Thidreks von Bern. Eugen Diederichs Verlag Jena 1924. S.215-9.

24) Vgl. Wolfgang GOLTHER(Hrsg.): Das Lied vom Hürnen Seyfrid. Max Niemeyer Halle 1911. S.3-4.

って来て、その親方——名前は挙げられていない——に仕えようとして、金槌を振り上げてみるが、持ち前の腕力のためにかえって鍛冶仕事には適しない。鉄を真っ二つに切り裂き、金敷を地面にめり込ませて咎められると、素直に教えを受け取らずに、反対に親方や徒弟を打ちのめしてしまうばかりである。

ティークの詩においては確かに顧問官たちの進言に関する叙述は見出されえないが、しかし、ティークの詩がこの韻文『不死身のザイフリート』第1-5詩節の叙述を下敷にしていることは、王子が「わがままな反抗心から」父の城を出たことばかりではなく、辿り着いた鍛冶屋での王子の腕白ぶり——金槌を力いっぱい振り上げて、金敷を地面にめり込ませたり、徒弟たちに悪戯^{いたづら}をしたりする乱暴行為——の描写が同じことから明らかである。ところが、鍛冶仕事の際に腕白少年が金槌でもって金敷を地面にめり込ませる^{くだり}件は、北欧の『ティードレクス・サガ』においても伝承されており、ティークは一方ではこの北欧の散文資料をも素材に用いたであろうことが推測される。事実、ティークの詩と『ティードレクス・サガ』との密接な関係は、あとに続く「竜との戦い」及び「ミーメル殺害」のエピソードにおいてなおいっそう明らかとなるのであり、それについてはのちに述べることになるであろう。また『ニーベルンゲンの歌』においては王子の鍛冶屋奉公のエピソードはすでに削除されているが、ティークの詩の第1連3行目に用いられている「ザンテン」(Santen)の地名などから、ティークはこの中世英雄叙事詩(第20詩節参照)をも傍らに置いていたことが推測される。いずれにしてもティークは従来のいくつかのジークフリート伝承を素材として自らの詩を書き上げたことは確かであるが、この最初のバラードにおける「鍛冶屋奉公」について言えば、ティークは従来の伝統的なジークフリート伝承を踏襲したにとどまっていた、ティークのロマンツェとしての特徴はまだ明らかには現われていないことが容易に理解できよう。

2) 竜との戦い

続く第10-15連で語られているジークフリートの「竜との戦い」のエピソードについても、ティークの詩としての特徴はあまり認められないが、この竜退治のエピソードは、上述の「鍛冶屋奉公」の場合とは逆に、現在に至るまでかなり多くの伝説資料が遺されている。北欧伝承の『歌謡エッダ』中の「ファーフニルの歌」や『ヴォルスンガ・サガ』及び『ティードレクス・サガ』においてはもちろんのこと、鍛冶屋でのエピソードが削除されていたドイツ伝承の『ニーベルンゲンの歌』でも竜退治のエピソードはハゲネの語りという形式(86-101詩節)で遺されている。ただこの竜退治のエピソードを語り伝える数多くの

伝承の中でも、北欧の『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』ではその後シグルズ（ジークフリート）が竜の血を浴びて不死身の肌となる^{くだり}件は語られていない。その^{くだり}件は北欧伝承では『ティードレクス・サガ』において辛うじて語り継がれているだけである。これに対してドイツ伝承ではジークフリートの皮膚の角質化はいずれの作品においても語り伝えられている。その中でもティークのこの詩における竜退治——第15連において主人公の皮膚の角質化を語っている——に密接な関係にあるのは、やはり何よりもまず十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』の冒頭部分（1-15詩節）であろう。

韻文『不死身のザイフリート』の冒頭部分の中でもザイフリートの竜退治とそれに伴う身体の角質化のエピソードを取り扱っているのは、第6詩節から第11詩節にかけてである²⁵⁾。それによると、腕白少年ザイフリートの乱暴な行為に困り果てていた鍛冶屋の親方は、ザイフリートが二度と戻って来られないようにと^{もくろ}目論んで、彼を森の中の炭焼き人のところへ使いに出させる。そこの近くの菩提樹のそばにはいつも恐ろしい竜が棲んでいて、鍛冶屋の親方はその竜が少年を片づけてくれるものと考えたからである。ところが、少年が菩提樹のところに着くと、いとも簡単に竜を打ち殺した。少年は炭焼き人のことを思い出して、さらに森の中へ入って行くと、その^{やまあい}山間の谷間にはこれまで見たこともないような悪竜やガマや毒蛇といった多くの怪獣が棲んでいたもので、少年は至るところの「木々」(die baumen)を引き抜いて (reißen)、それを怪獣どもに投げつけると、すべての怪獣は足留めされて、そこから逃げ出すこともできない。そこで彼は炭焼き人のところから火を持って来て、薪に火をつけて怪獣どもを焼き殺してしまうと、怪獣どもの角質は柔らかくなって、小川となって流れ出てきた。ザイフリートはこれに大変驚いて、一本の指をその中に浸した。すると指は冷えると角質となったので、ザイフリートはその小川の中に身体をたっぷり浸すと、身体全体がすっかり角質となった。ただ両肩の間だけはそうならず、まさにこの箇所ので彼のはのちに命を失うことになるのである。

このように韻文『不死身のザイフリート』冒頭部分における竜退治は二度にわたって展開されているので、その点でティークの詩とは若干相違を見せているが、しかし、鍛冶屋の親方に唆されて少年が森へ出かける^{くだり}件（ティークの詩10-11連）は言うまでもなく、腕白少年が伝統的な伝承の「名剣」ではなく、「木の枝」(Baumzweige) でもって竜を打ちのめした（ティーク13-14連）あと、その竜の血で角質の皮膚と化する点（ティーク15連）などでも著しく類似

25) Vgl. Wolfgang GOLTHERR(Hrsg.): a.a.O., S.5-7.

しており、両者の密接な関係は明らかに認められよう。ところが、伝統的な「名剣」ではなく、特に「木の枝」でもって竜を打ち倒し、しかも竜を焼き殺したあとに流れ出てきた血潮に浸って角質の肌となるエピソードは、北欧伝承の『ティードレクス・サガ』においても語り継がれており²⁶⁾、ティークのこの詩における竜退治は、他方では『ティードレクス・サガ』とも関係が深いことが推測される。特にティークの詩の第14連に読み取られる「森の中での食事」——韻文『不死身のザイフリート』には見出されない——は、『ティードレクス・サガ』における「食事」の場面²⁷⁾を思い起こさせる。ただここではそれが第14連中の一行だけで済まされていて、ジークフリートが退治した竜をどのように料理して食べたのか、その辺の詳細は分からない。しかし、いずれにしてもこの「食事」のエピソードがティークの詩に取り入れられていることから、ティークのこの詩における竜退治の描写は『ティードレクス・サガ』に最も密接な関係にあることが推測される。さらに両者の密接な関係をなおいっそう明白に示しているものとして挙げられるのが、この竜退治のあとに語られているエピソード、すなわち、韻文『不死身のザイフリート』においては語られていない「ミーメル殺害」のエピソードである。

3) ミーメル殺害

ティークの詩の第16-21連で取り扱われているこの「ミーメル殺害」のエピソードは、もちろん『ティードレクス・サガ』のほかにも、例えば、『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」や『ヴォルスンガ・サガ』——ただし、名前はレギン——などにおいても伝承されているが、しかし、鍛冶屋の親方の名前としてミーメを用いている『ティードレクス・サガ』ほどティークの詩により密接な関係にあるものはほかにはないと言ってよいであろう。

その『ティードレクス・サガ』の語り伝えるところ²⁸⁾によると、竜を倒した

26) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): a.a.O., S.219-20.

27) 『ティードレクス・サガ』では「食事」のエピソードは二箇所——炭焼きの仕事のあと九日分の弁当を一度に平らげる場面(後述64頁参照、脚註33)と竜退治のあとそれを料理して食べる場面(後述65頁参照、脚註35)——において展開されているが、ここで想起されるのはもちろん後者のエピソードである。なお、前者のエピソードについてはティークのもう一つの詩『竜殺しのジークフリート』(23-24連)において取り扱われているので、後述のその箇所(63-64頁)を参照されたい。

28) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): a.a.O., S.221.

ジグルト（ジークフリート）は、ティークの詩の第16連及び第18連が語っているのと同じように、竜の頭を斬り落として、それを手に持って鍛冶屋の親方のもとに戻って来る。ジグルトが怒っている様子を見て取った徒弟たちは、皆恐れて森の中へ走り去って身を隠す。親方のミーメだけが彼を出迎えて、機嫌をとろうとして鎖かたびらと兜と楯のほかに名剣グラムを与えるが、ジグルトはその名剣を受け取るや否や、それを力いっぱい振り上げてミーメに死の一撃を加えてしまう。そしてジグルトはあらかじめミーメに教えられていた道を辿って、ブリュンヒルトの城へ向かうのである。

このように最後の方で、ブリュンヒルトが筋の展開に関与して登場してくる点では『ティードレクス・サガ』は——その後ジグルトの物語がさらに続くため——ティークの詩とは異なるが、しかし、その他の点では細かな表現に至るまでかなり似通っていることは明らかであり、ティークがこの北欧伝承の『ティードレクス・サガ』をも傍らに置いていたことはもはや疑う余地はあるまい。ともかくもティークはこのようにドイツ伝承の十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』のみならず、北欧伝承の『ティードレクス・サガ』などをはじめとするいくつかのジークフリート伝説を参考にして、自らの『若き日のジークフリート』の詩を書き上げたものと推測されるが、しかし、「鍛冶屋でのジークフリート」及び「竜との戦い」においてと同様に、この「ミーメル殺害」においても、ティークは従来の素材を忠実に保存しただけにとどまっていて、彼のロマンツェとしての特徴はあまり出ていない。ティークのロマンツェの特徴がよく出ているのが、もう一つの詩『竜殺しのジークフリート』においてである。次にその詩を検討することにしよう。

III. ティーク作『竜殺しのジークフリート』

この詩のテキストも同様に『ルートヴィヒ・ティーク著作集』第7巻²⁹⁾に拠り、のちの解説の都合上、四行一連の原詩に番号を付け、詩全体を便宜的に三つに分け、それぞれに小見出しを付けておく。また、のちの解説に特に必要となる箇所には、前作と同様に、下線をも付しておく。なお、邦訳は拙訳であり、原詩——同様に二行目と四行目が脚韻を踏む——の大意を示すものである。

29) Ruprecht WIMMER(Hrsg.): a.a.O., S.380-8.

》Siegfried der Drachentöter《 『竜殺しのジークフリート』

(1. 鍛冶屋でのジークフリート)

Im Walde lebte Mimer	森の中、高い岩山の近くに
Und bei den Felsenhöhn,	ミーメルが住んでいた。
Dem kam der kühne Siegfried	そこへやって来たのが
In früher Jugend schön.	(1) 大変若い、勇敢なジークフリート。

Der Meister lehrt ihm schmieden,	親方は彼に鍛冶仕事を教える。
Siegfried war wohlgemut,	ジークフリートは元気潑刺。
Er schlug all die Gesellen	仲間を皆、打ちのめしては
In Lust und Übermut.	(2) 喜んだり、威張ったり。

Sie fürchteten ihn alle,	彼らは皆、彼を恐れた。
Er brächte ihnen Not,	ひどい目にあわされたから。
Bald zog er sie an Haaren,	あるときは髪を引っ張られたり、
Bald droht' er ihnen Tod.	(3) あるときは殺すぞと威されたりして。

Mimer, mit klugen Sinnen	ミーメルが賢くも
Wußt', wie im finstern Wald	思いついたのは、陰鬱な森の
Ein Drache hatte drinnen	洞穴の中に一匹の竜が
Im Fels den Aufenthalt,	(4) 棲んでいたこと。

Der mochte alle töten,	竜は何でも殺してしまい、
Daß selbst die Kühnsten flohn.	最強の者さえ逃げ去るほど。
Der Meister sprach in Nöten:	親方は困り果てて言うには、
Der Knabe spricht uns Hohn,	(5) 「少年は我らに罵言を吐いたり、

Er trotzt in seiner Stärke,	腕力で逆らったり、
Und droht uns zu erschlagen,	打ち殺すぞと威したりする。
Er mag sich zu dem Berge	彼をあそこの山の荒れ地へ
Dort in die Wildnis wagen.	(6) 行かせることにしよう。」

Sie lobten, was der Meister	親方が考え出したことを
-----------------------------	-------------

In seinen Sinn genommen,
Da war Siegfried der dreiste
In Freuden hergekommen.

皆はほめたたえた。
そこへ図太いジークフリートが
(7) 喜び勇んで近づいた。

Er lachte, als er sahe,
Wie sehr ihn alle scheuten,
Er sprach: ich diene zagen
Und ungemuten Leuten,

皆が自分をひどく恐れているの
を見ると、彼は笑って、
言った。「俺は何と臆病で
(8) 勇気のない人々に仕えたことか。

Wie ich nicht Harnisch trage
Und auch kein Sturmgewand,
Wie könnt' ich euch erst schlagen,
Hätt' ich ein Schwert zur Hand.

俺は鎧もつけていないし、
武装もしていないのに。
これで剣でも手にすれば、お前たち
(9) を打ち殺すこともできよう。」

Da sprach der Schmied, der kluge:
Du mußt nicht, wildes Kind,
Dem Meister also trotzen,
Geh in den Wald geschwind,

そこで賢い鍛冶屋が言うには、
「腕白小僧よ、お前は
親方に逆らってはならない。
(10) ただちに森へ行くのだ。

Vorbei dem tiefen Brunnen,
Wo dunkle Weiden stehn,
Der Felsenkluft vorüber,
Und wo im Winde wehn

陰鬱にヤナギが茂っている
深い泉のそばを通って、
険しい山峡も通り抜けて。
(11) その険しい山の

An einem schroffen Berge
Auf rundem grünem Raum
Umher viele der Eschen,
Und mancher Tannenbaum:

丸くて緑色の空き地の上では
まわりで多くのトネリコの木と
多くのモミの木が
(12) 風になびいている。

Und wo ein Wasser fließend
Rund um den Felsen braust,
Und auf den Bergesspitzen
Manch wilder Adler haust:

さらにその岩山のまわりでは
川も音を立てて流れている。
そして山頂には
(13) 多くの猛々しい鷲が棲んでいる。

Dort sollst du Bäume fällen そこでお前は、俺の鍛冶仕事の
 Zu meinem Eisenwerk, ために、木を切り倒すのだ。
 Und wenn die Nacht herdämmert そして夜になっても
 So bleibe dort im Berg: (14) その山中にとどまるのだ。

Auch Kohlen mußt du brennen, 俺が働けるよう、
 Daß ich arbeiten mag, お前は炭も焼かねばならぬ。
 Ich will dir Speise geben まる七日分の食べ物を
 Auf sieben volle Tag, (15) 持たせてあげよう。

Daß du nicht dürfest darben, その時まで
 Umkehren vor der Zeit. 引き返さなくともよいように。」
 Siegfried, der Jüngling starke, 強くて若いジークフリートは
 War dessen hochof freut. (16) それを大いに喜んだ。

Mimer, der kluge, wußte, 賢いミーメルは、
 Täglich zur Steineswand 毎日岩壁のところに
 Der Drach' aus seinen Klüften 竜が洞穴から水を飲み
 Zu trinken her sich wand. (17) 出て来るのを知っていたのだ。

(2. 竜との戦い)

Bald gehend und bald springend 歩いたり、飛び跳ねたりして、
 Siegfried mit Schritten schnell ジークフリートは素早い足取りで、
 Lief nach dem Walde singend, 歌を口ずさみながら森へ向かった。
 Es schien die Sonne hell. (18) 太陽が明るく輝いていた。

Er fand bald nach den Zeichen 彼はやがて教えられた通り、
 Den tief verborgnen Berg, 人知れぬ奥深い山を見つけ出し、
 Begann alsbald mit Freuden ただちに喜び勇んで
 Sein aufgetragnes Werk. (19) 頼まれた仕事を始めた。

Die Axt klang an den Bäumen, 斧は木に当たって鳴り響き、
 Ein Feuer er entbrann, 彼は火を起こした。
 Der Wald und Bach erglänzte; 森と小川はきらめき輝いた。

Nun saß der kühne Mann (20) やがて勇敢な男は飽き果てて

Um auszuruhn verdrossen, 休むために腰を下ろした。
 Die Arbeit tat ihm leid, 仕事は彼には苦痛であった。
 Eine Lind breit und große 太くて高い菩提樹が
 Gab ihren Schatten weit, (21) 広く木陰を投げかけていた。

Darauf sungen viel Vögelein, その上では多くの小鳥が囀り、
 Darunter ging der Bach, 下では小川が流れ、
 Auch Rosen blühten rötlich, バラも赤々と咲きそめて、
 Mit Freuden er das sach. (22) 彼はそれを眺めて喜んだ。

Er nahm die Essens-Speise, 彼は持参した
 Die er da mit sich trug, 食べ物を手に取るが、
 Die Mimer ihm bereitet それはミーメルが七日分として
 Für sieben Tag' genug. (23) 彼に用意していたもの。

Die nahm er wohlgemutet, 彼はそれを喜んで手に取り、
 Auf einmal er sie aß, 一度にそれを食べ尽くす。
 Dann trank er von dem Brunnen それから泉の水を飲むと、
 Und ruht' im grünen Gras. (24) 緑の草地で休息する。

Die Axt warf er von hinnen 彼は斧を投げ捨て、
 Und sah die Blumen an; 花を眺めて、言うには、
 Er sprach: schlecht Werk ist schmieden 「鍛冶仕事はひどいもの。
 Und ziemet keinem Mann, (25) 男のするものではない。

Von Abenteuern, Gefahren, 幼少の頃、俺は
 Hört' ich so vieles sagen, 危険な冒険や
 Von manchem wilden Kampfe 多くの激しい戦いについて
 In meinen Kindestagen. (26) 多く語られるのを聞いたことがある。

O käm' doch aus dem Dunkel ああ、暗闇から
 Ein wildes Scheusal her! 乱暴なならず者が出て来たらなあ！

- Ich bin so wohlgemutet,
Ich achtet' es nicht sehr;
- Ich bin so wohlgemutet,
Ich achtet' es nicht sehr;
- Voll Kraft sind meine Arme,
Ich bin so satt und froh;
In seinem Übermute
Der Jüngling sprach also.
- Der kam in langen Zügen
Der Drache hergewunden,
Vom Strom sah er ihn trinken,
Mit klugem Aug' erkunden
- Den Jüngling auf der Wiese,
Den sprang er brüllend an,
Daß fürchterlich erklungen
Weithin der dunkle Tann,
- Und alle Berge grüne,
Die Adler flogen scheu
Von ihren hohen Nestern
Geschreckt mit bangem Schrei.
- Siegfried sah still das Wunder,
Er von dem Lager sprang,
Der Wurm in weiten Ringen
Zum kühnen Jüngling drang.
- Der schützte sich mit Zweigen
Und gab ihm manchen Schlag,
Manch Baum von harten Streichen
Auf des Wurms Rücken brach.
- Stahlhart waren die Schuppen,
- 俺は元気潑刺、
(27) それをまったく気にかけない。
- 俺の腕は力に満ち溢れ、
大変満足していて、心楽しい。」
思い上がって、
(28) 若者はそのように語った。
- そこへ長々と曲がりくねって
竜が現われ出た。
竜は川の水を飲むと、
(29) 鋭い目で草地の上に
- 若者を探し出した。
竜は吠えながら彼に飛びかかると、
鬱蒼^{うっそう}たる森は遠くまで
(30) 恐ろしい響きが轟いた。
- 緑のすべての山々も同様。
驚は驚いて
高い巢から飛び立ち、
(31) 恐れて心配そうな叫び声を上げる。
- ジークフリートは静かに怪獣を見て、
寝ていた大地から跳び上がった。
竜は広い輪をかいて
(32) 勇敢な少年に襲いかかった。
- 少年は木の枝で自らを護り、
竜に多くの打撃を与えた。
激しい打撃のために多くの木は
(33) 竜の背中にあたってこわれた。
- 鱗^{うろこ}は鋼鉄のように堅く、

Die Klauen schwerterscharf, 爪は剣のように鋭かった。
 Siegfried sprang von dem Wurm, ジークフリートは竜から飛び退き、
 Die Zweig' er von sich warf; (34) 木の枝を自ら投げつけた。

Die Axt ergriff er wieder, 彼は斧を再び手に取って、
 Er tat so grimm'gen Schlag, 激しく打ちかかると、
 Daß gleich zu seinen Füßen 即刻、竜は頭なしで
 Der Drache hauptlos lag. (35) 彼の足もとに倒れた。

Ein großer Strom des Blutes 血の大きな流れが、地面から
 Rann dampfend durch den Grund, 湯気を出しながら流れ出て来た。
 Es färbte dunkel purpurn それはまわりの花や灌木を
 Blumen und Sträucher rund, (36) 濃い紅色に染めた。

Und sammelte sich nieder, そして下にたまと、
 So wie ein großer See. 大きな湖のような有様。
 Siegfriede saß dann wieder, ジークフリートはその後再び座るが、
 Der Schlag tat selbst ihm weh. (37) 一撃は自らにも痛かった。

(3. 小鳥たちの声)

Die Einsamkeit ward stiller, 静寂はいっそう深まり、
 Flüsternd ging hin ein Wind, 囁くように風は吹き去って、
 Und strich durch Tann und Eiche モミの木とカシの木を
 So kühlend und gelind; (38) いとも涼しげに穏やかに撫でつける。

Der Bach ging dahin rieselnde, 小川はサラサラ流れ、
 Aus Bergen kam ein Schall, 山々からは響き声が聞こえる。
 Und widerstreitend liebliche そして多くの小夜鳴鳥が
 Sang manche Nachtigall. (39) 交互に囀る愛の声。

Da dünkt dem jungen Helden, 若い英雄には、あたかも
 Er sei im süßen Traum, 甘い夢の中にいるかのよう。
 Sinnend saß er und denkend 思案し、考えながら彼は
 Am grünen Lindenbaum. (40) 緑の菩提樹のそばにすわっている。

- Sein Herze strebt so mutig,
 Sein Auge war so hell,
 Als er den See schaut blutig
 Neben dem blauen Quell,
- (41) 彼の心はいとも勇敢、
 目はいとも明るい。
 青い泉のそばには
 血だらけの湖を見、
- Und über sich im Wipfel
 Vernimmt er lieblich Schallen,
 Es ist Klagen und Girren
 Von zweien Nachtigallen.
- (42) 頭上の梢には
 愛らしい響きを聞く。
 それは二羽のナイチンゲール小夜鳴鳥が
 焦がれ泣く嘆き声。
- Und wie er sich besinnet
 Und recht den Laut erfand,
Siegfried im Herzen fühlte,
Daß er den Ton verstand.
- (43) よく考えて
 しかとその声を聞くや、
ジークフリートは心の中で、
その声が理解できたような気がした。
- Der junge Sohn Siegmundes,
 Sang diese wunderbar,
 Vollbrachte hier ein Großes,
 Was schon seit manchem Jahr
- (44) 一羽のナイチンゲール小夜鳴鳥が美しく歌うには、
 「ジークムントの若い息子は
 ここで偉大なことを為し遂げた。
 すでにかなり以前から
- Kein Held nicht durfte lösen;
 Ihn hat hierher gebracht
 Mimer mit seinen Tücken,
 Doch dieses nicht gedacht.
- (45) どんな英雄にもできなかったことを。
 彼をここに導いたのは
 ミーメルミーメルの策略。
 でもこのことは考え及ばない。
- Er wird der Held, der kühneste,
 Berühmt in aller Zeit,
 Er wird der Recke schöneste,
 Zu Taten hochofpreut,
- (46) 彼は最も勇敢な英雄となり、
 いつの時代でも有名な存在。
 彼は最も美しい勇士となり、
 行動をいとも喜ぶ。
- Seine Jugend die liebliche
 Erfrischt jeden Mut,
 In Schild und Harnisch spielende
 Vergießt er vieler Blut.
- (47) その愛らしい青春は
 どんな勇気をも新たに、
 楯と鎧を身につけ、
 彼は多くの血を流す。

Siegfried war froh und staunte,
Da hub die andre an
Im Wechselsang so laute,
Daß widerscholl der Tann: (48) ジークフリートは心楽しく、驚いた。
もう一羽の鳥が交互の歌で
声高らかに歌い始めたので、
森が鳴り響いた。

Wüßt' er die rechte Märe,
Ihm wär' es noch gelungener,
Er hätte größere Ehre
Und bliebe unbezwungener, (49) 「彼が本当の話を知ったら、
もっと成功を収めるだろう。
彼はもっと大きな名誉を得、
征服されないままでもあろう。」

Wenn er nackend im Blute
Den Leib, den schönen, badete,
Kein Eisen ihn verwundete,
Nicht Lanz und Schwert ihm schadete. (50) 彼が裸になって血の中に
その美しい身体を浸したら、
どんな鉄も彼を傷つけえないし、
槍も剣も彼を傷つけることはない。」

Da sprang der Jüngling nacket
In das rauchende Blut,
Er kühlt' im roten Bade
Den heißen Übermut. (51) そこで若者は裸になって跳び込むは、
湯気の立つ血の中。
彼は赤い血の中で
熱い慢心を冷やす。

Da sang der Vogel girrende
Mit süß klagendem Ton:
Bald wird das Gold, das schimmernde,
Dir Siegemundes Sohn, (52) そこで鳥が囁きながら
甘い嘆きの声で歌うには、
「やがてきらめく黄金が、
ジークムントの息子のものとなる。」

Das Drachenbett, das glänzende,
Auf dem der gift'ge lag,
Sich in den Gluten wälzende,
Ihm schien die Nacht wie Tag; (53) 有毒の竜が横たわり、
赤熱の中にくろがっていた
輝く竜の寝床は、
夜も昼のように輝く。

Die Edelstein' die funkelnden,
Die ihm geleuchtet spat,
Die Lagerstelle wunderbar
Siegfried gewonnen hat. (54) きらめく宝石は
のちに彼に輝き、
すばらしい寝床をも
ジークフリートは勝ち得てしまう。」

Nicht wußte das der Kühne,
Daß sie vom Schatze sungen,
Den dann gewann Siegfriede
Ab von den Nibelungen.

勇者は、小鳥たちが財宝について
歌っていることを知らなかった。
それをジークフリートはその後
(55) ニーベルング族から勝ち得たのだが。

Hell stieg er aus dem Blute,
Da war er schön und groß,
Auch dünkt' er sich an Mute
Den Edelsten Genöß.

彼は血の中から元気よく出てきた。
すると彼の身体は美しく大きい。
彼はまた勇気において
(56) 自ら最も気高いと感じた。

Es mochte keine Wunde
Verletzen je den Mann,
Doch wie er auch vom Blute
Den Zauber sich gewann,

どんな傷も今後
その男に与えられることはなかろう。
しかし、彼はいくら竜の血から
(57) 魔力を勝ち得たとはいえ、

Fiel doch unwissend seiner
Ein Blatt ab von der Lind,
Ihm zwischen weiße Schultern,
Daran starb Siegmunds Kind.

気づかぬ間に
菩提樹の一枚の葉が
彼の白い両肩間に落ちてきて、
(58) そのためジークムントの子は死ぬ
運命にあった。

以上、カッコ内に小見出しを付しておいたように、詩の全体の内容は、1)「鍛冶屋でのジークフリート」、2)「竜との戦い」、3)「小鳥たちの声」という三つの部分に分けられよう。これらのうち1)と2)は、すでに上で取り扱った『若き日のジークフリート』におけるそれぞれのエピソードを敷衍したものであるが、3)はこの『竜殺しのジークフリート』において新たに取り入れられたエピソードである。前述の『若き日のジークフリート』と比較しながら、またときには従来のジークフリート伝説をも引き合いに出しながら、それぞれのエピソードについてティークの詩の特質を探り出すことにしよう。

1) 鍛冶屋でのジークフリート

第1-17連で語られている「ジークフリートの鍛冶屋奉公」は、基本的には前述の『若き日のジークフリート』第1-9連のエピソードと同じ素材を用いて、およそ二倍の長さに敷衍したものであり、その内容は前半(第1-9連)

と後半（第10－17連）に分けられよう。

まず前半部分（第1－9連）において語られているのは、森の中の鍛冶屋ミーメルのもとにやって来たジークフリート——王子であることは明確には記されていない——の腕白ぶりである。親方ミーメルが彼に鍛冶仕事を教えるものの、元気潑刺のジークフリートが親方や徒弟たちを打ちのめしたりすることは、前述の『若き日のジークフリート』の場合と同様である。ただその前作において取り扱われていたエピソード、すなわち、力いっぱい金槌を振り上げて、金敷を地面に深くめり込ませるエピソードは、この詩では省略されており、その代わりにジークフリートの腕白ぶりを示すものとして、徒弟たちの髪を引っ張ったりする行為が第3連において具体的に挙げられている。この「髪を引っ張る」行為はドイツ伝承の十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』の中には取り入れられていない³⁰⁾が、北欧伝承の『ティードレクス・サガ』では語り伝えられており、それを紹介すると、次の通りである。

『ティードレクス・サガ』のその部分³¹⁾が語るところによると、鍛冶屋ミーメルには十二人の徒弟が仕えていたが、その中で最も有能な徒弟がエッキハルトという少年であった。ある日のこと、ジグルト（ジークフリート）が鍛冶場へ行くと、エッキハルトが鍛冶仕事をしていた。エッキハルトはジグルトの耳を火ばさみで打ちのめしたので、ジグルトは左手で「相手の髪のを力いっぱい引きちぎる」(riß ihn ... so fest bei den Haaren)と、相手は地面に倒れた。たちまちほかの徒弟たちがエッキハルトに味方しようとして駆けつけて来るが、ジグルトはすばやく扉から逃れ去り、「エッキハルトの髪のを引っ張って」(zog Eckihard an den Haaren hinter sich her)、親方ミーメの前へ引きずって行くのである。

ティークの詩の第3連における「徒弟たちの髪を引っ張る」(zog sie an Haaren)行為は、まさにこの『ティードレクス・サガ』におけるエッキハルトへの二度にもわたる乱暴な行為のヴァリエーションと考えてもよいのではあるまいか。ともかくもジークフリートの腕白ぶりがここでは「髪を引っ張る」というかた

30) ただし、韻文『不死身のザイフリート』の主要部分（16－172詩節）ではザイフリートが侏儒オイゲルの髪をつかんで、侏儒を岩壁に投げつける（57詩節参照）エピソードが見出される。また民衆本『不死身のジークフリート』では、逆にジークフリートが鍛冶屋の親方に髪を引っ張られ、そのためにジークフリートが親方の襟をつかんで地面に投げつけたり、その徒弟たちをも同様にいためつけることになっている。

31) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): a.a.O., S.218-9.

ちで表わされているのであり、このような乱暴なジークフリートを親方ミーメルは片づけようとするのである。

そこで親方ミーメルが腕白少年を片づけようとして、竜の棲む陰鬱な森へ遣わせるエピソードを語っているのが後半部分(10-17連)である。『ティードレクス・サガ』などの従来の伝承ではこの場面はごく簡単に済まされているのに対して、ティークの詩では詳細に語られている。しかもそのほとんどが鍛冶屋ミーメルの言葉として表現されており、ミーメルの言葉を通して、森までの道の様子が、自然描写を表わす多くの単語でもって、詳しく生き生きと描き出されている。例えば、第11連においては「深い泉」(dem tiefen Brunnen)、「陰鬱なヤナギ」(dunkle Weiden)や「険しい山峡」(Felsenkluff)、第12連においては「丸くて緑色の空き地」(auf runden grünen Raum)、「多くのトネリコの木」(viele der Eschen)や「多くのモミの木」(mancher Tannenbaum)、さらに第13連では「音を立てて流れている川」(ein Wasser fließend)や「多くの猛々しい鷲」(manch wilder Adler)等々、自然描写が巧みに展開されていることが理解されよう。これらは従来の伝承には見出されない叙述であり、まさにこのような巧みな自然描写を表わす多くの単語でもって、森までの道の様子を、しかも親方ミーメルの言葉として、詳しく語っているところにティークの詩の特徴があると言えよう。

2) 竜との戦い

続く第18-37連において取り扱われている「竜との戦い」のエピソードもまた、前作『若き日のジークフリート』と同じ素材を用いて、およそ二倍の長さに敷衍したものであり、その内容は前半(18-28連)と後半(29-37連)に分けられる。

まず前半部分(18-28連)ではジークフリートが森へ出かけて、親方ミーメルに頼まれた仕事を済ませたあと、持参した七日分の弁当を食べ尽くすエピソードが語られている。このような森の中でのジークフリートの仕事ぶりと弁当を一度に食べ尽くす^{くだり}件を伝える作品は数少なく、現在知られている限りでは『ティードレクス・サガ』以外には見出されえない。『ティードレクス・サガ』におけるその場面³²⁾を簡単に紹介すると、次の通りである。

鍛冶屋ミーメから九日分の弁当とワインのほかに斧を与えられたジグルトは、森に辿り着くと、さっそく頼まれた炭焼きの仕事に取りかかり、斧で大木を切

32) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): a.a.O., S.219-20.

り倒し、火を起こして、そこへ大木を運んだりする。そして朝食時には煙突のそばに腰を下ろして、食事を取った³³⁾。ところがジグルトは、ミーメが十分だと思っていた九日分の弁当をすべて一度に平らげてしまい、ワインも一滴も残らないほど飲み干してしまった。それからジグルトは独り言をつぶやいて言うには、「邪魔になるような奴が現われ出てきたら、そいつを打ちのめさずにいるものか！」このような言葉を吐くや否や、大きな竜が彼の方に向かって現われ出て来て、両者の戦いが始まることとなるのである。

ティークの詩においてはなるほど鍛冶屋ミーメルから与えられた弁当が「九日分」ではなく、「七日分」(第23連)となっており、また飲み物が「ワイン」ではなく、「泉の水」(第24連)となっているが、しかし、それらの細かな相違はそれほど問題ではない。それよりもまず森でのエピソード全体の流れが『ティードレクス・サガ』に酷似している点に注目すれば、ティークの詩が『ティードレクス・サガ』の叙述を下敷にしていることは明白である。しかし、ティークは至るところにロマンツェとしての自らの特色を示すことを怠ってはいない。例えば、第18連の「明るい太陽」(die Sonne hell)、第20連の「きらめき輝く森と小川」(der Wald und Bach erglänzte)、第21連における「太くて高い菩提樹」(eine Lind breit und große)、第22連における「赤々と咲きそめるバラ」(Rosen blühten rötlich)そして第24連における「緑の草地」(im grünen Gras)及び第25連の「花」(die Blumen)など、自然描写を表わす言葉が数多くちりばめられて、今までのジークフリート伝説にはなかったロマンツェ的色彩が強くなっていることが容易に理解されよう。

続く後半部分(29-37連)で取り扱われているのが「竜との戦い」である。この竜退治はほとんどすべての作品において伝承されているほど有名な件^{くんだり}であるが、このティークの詩の後半部分(29-37連)における竜との戦いは、前半部分(18-28連)と同様、特に『ティードレクス・サガ』を下敷にしたものであることは、『ティードレクス・サガ』のその場面を辿って見れば自ずと明らかである。

『ティードレクス・サガ』が続いて語っているところ³⁴⁾によると、ジグルトは竜が自分の前に現われ出てきたのを目にするや否や、起こしていた火のところへ跳んで行って、その中で燃えていた「最も大きな枝」(den größten Baumstamm)を手にする。ジグルトはそれをもって竜に立ち向かい、竜の頭をめが

33) 脚註27参照のこと。

34) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): a.a.O., S.220.

けて打ちのめすと、竜は毒を吐くことも叶わず、頭が地面に倒れ落ちてしまう。ジグルトはそれでも一撃を加え続けたので、竜はついに死んでしまった。それから彼は斧をつかんで、竜の頭を斬り落とすと、腰を下ろして休息する。そうこうしているうちに時は過ぎてゆき、彼は夕方までに家へ帰ることができないことに気がつき、夕食には竜を料理して食べることにした³⁵⁾。そこで彼はさっそく鍋に水を満たして、それを火の上にかけた。それから彼は斧で竜の肉を切り取って、鍋の中に入れる。十分煮えたと思って、手を鍋の中に差し込んでみると、その瞬間彼は火傷をして、とっさに指を口の中に入れて冷やした。竜の汁が彼の舌に触れるや否や、彼は鳥の言葉が理解できるようになり、二羽の鳥が枝にとまって、互いに囁き合っているのを聞いたのである。

ティークの詩では確かに竜を料理して食べるエピソードも出てこなければ、竜の血で小鳥の声が分かるようになるエピソードも語られていないが、しかし、特に「木の枝」でもって竜を打ち倒すエピソード（第33-34連）——『ティードレクス・サガ』及び韻文『不死身のザイフリート』において見出される——並びにその後「小鳥の声」のエピソード——韻文『不死身のザイフリート』には見出されない——が続いていることなどから、ティークのこの詩における竜退治は特に『ティードレクス・サガ』に由来するものと断言してもよいであろう。この竜退治の件はよく知られた有名なものであるだけに、ティークの特徴はあまりはっきりとは読み取られえないが、第29連から第32連にかけて竜が現われ出て、少年ジークフリートに襲いかかってゆく場面などは、前作『若き日のジークフリート』の簡単な叙述（第13-14連）とは逆に、細部にわたって詳しく描かれていて印象的である。

3) 小鳥たちの声

そのあとの第38-58連において語られている「小鳥たちの声」は、前作『若き日のジークフリート』では取り扱われておらず、この詩の中に初めて取り入れられた新しいエピソードである。この「小鳥たちの声」は通常①ミーメ（ミーマル）の悪企み、②財宝の在処、③不死身の肌、④ブリュンヒルトの存在という四つの内容に分類されるが、このような小鳥の声に関するエピソードはドイツ伝承には見出されず、北欧伝承においてのみ読み取られうるものである。

北欧伝承の中でも『歌謡エッダ』中の「ファーヴニルの歌」や『ヴォルスンガ・サガ』においては「小鳥たちの声」は①養父（レギン）の悪企み、②財宝

35) 脚註27参照のこと。

の在^{あり}処、及び④ブリュンヒルトの存在の三つに関連づけられているが、ただ③不死身の肌だけには関連づけられていない。すなわち、それらの作品が語るところ³⁶⁾によると、竜を打ち倒したシグルズは、その心臓を切り取り、養父レギンの要求に従って、それを串の上で焼く。心臓から泡が出てきたとき、シグルズは指でさわって焼けているか調べた瞬間、指を口に突っ込む。竜の心臓の血が舌に触れて、彼は鳥の言葉が理解できるようになった。鳥たちが囁^{ささ}っている声から、レギンが裏切る魂胆でいることを知ると、シグルズは名剣グラムを振り上げてレギンの頭を斬り落とした。そのあとシグルズは竜の心臓の一部を食べると、鳥たちの声に従って、ファーヴニルの通った跡を辿って洞窟に行き、そこで莫大な黄金を見つけ、ついにその所有者となった。その後、シグルズはさらに鳥たちの声に従って、ブリュンヒルトが眠っているヒンダルフィヤルの山に向かうのである。このように『歌謡エッダ』や『ヴォルスunga・サガ』の伝承ではシグルズは鳥の言葉が分かるようになって、その助言に従って養父レギンを殺害し、財宝の所有者となったのち、ブリュンヒルトの眠るヒンダルフィヤルの山に向かうのであり、ともかくもここではシグルズが竜の血で不死身の肌となる上記③のエピソードは取り入れられていないことが理解できよう。

北欧伝承の中で主人公が竜の血を浴びて不死身の肌となる^{くんだり}件（上記③のエピソード）を語り伝えているのが、『ティードレクス・サガ』である。ただし、この作品では不死身の肌のエピソードは「小鳥たちの声」には直接的には関連づけられていない。すなわち、『ティードレクス・サガ』のその場面³⁷⁾が語るところによると、鍋で煮た竜の汁が舌に触れて、シグルトは枝にとまって互いに囁^{ささ}っている二羽の鳥の声が分かるようになるのであるが、その鳥の声の内容は養父ミーメの悪企み（上記①のエピソード）に関するものだけである。確かにこの鳥の声を聞いた直後に、シグルトが竜の血を身体全体に塗りつけて不死身の肌となる^{くんだり}件（上記③のエピソード）が描写されているが、しかしその叙述は小鳥の声には直接的に関連づけられていないのである。ともかくもシグルトは不死身の肌となったあと、竜の頭を斬り取って、それを手に持って養父ミーメのもとに帰ると、怒りをあらわにして、鳥の忠告通り、養父をついには殺害してしまうのである。従って、ここではその他のエピソード、すなわち、小鳥たちがシグルトに財宝の在^{あり}処を教える②のエピソードも語られていなければ、小鳥たちがシグルトにブリュンヒルトの存在を教える④のエピソードも語られてい

36) 谷口幸男訳：前掲書138-43頁、及び菅原邦城訳：前掲書56-8頁参照。

37) Vgl. Fine ERICHSEN(Übertragen): a.a.O., S.220.

ない。ジグルトがその後ブリュンヒルトの城を訪ねるのは、養父ミーメからその飼育場にはグラーネという名の雄馬がいると教えられていたからである。このように『ティードレクス・サガ』においては②財宝の^{ありか}在処以外のエピソードは何らかのかたちですべて取り入れられているが、しかし、「小鳥たちの声」に結びつけられているのは養父ミーメの悪企み（上記①のエピソード）だけであることが容易に理解できよう。

これらの北欧伝承に対してティークの詩では「小鳥たちの声」はどのように取り扱われているのであろうか。まず前半部分（第38－43連）においてはジークフリートが小鳥の声を理解することができるようになった次第が語られているが、しかし、それは北欧伝承においてのように竜の血が舌に触れた結果としては語られていない。この場面はすべてロマンティックな雰囲気の中で展開されており、第40連で明らかにされているように、ジークフリートには「あたかも甘い夢の中にいるかのよう」(Er sei im süßen Traum)に感ぜられたのであり、従って、周囲の森の自然もそれに相応しく聴覚的に描写されている。例えば、第38連においては「囁くような風」(flüsternd)が「モミの木とカシの木」(durch Tann und Eiche)を「いとも涼しげに穏やかに」(so kühlend und gelind)撫でつける。続く第39連においては「小川はサラサラ流れ」(der Bach ging dahin rieselnde)、山々からは「多くの^{ナイチンゲール}小夜鳴鳥」(manche Nachtigall)の「交互に^{さえず}囀る愛の声」(widerstreitend liebliche)が聞こえてくる。このような聴覚的描写のみならず、視覚的描写も同時に読み取られうる。例えば、第40連の「菩提樹」(Lindenbaum)には「緑」(grün)という形容詞が添えられておれば、第41連では「泉」(Quell)に「青」(blau)の形容詞が付されており、さらに多量に流れ出てきた竜の「赤い血」(blutig)は「湖」(den See)に喩えられていて、まことに色鮮やかである。これらを眺めるジークフリートの「心はいとも勇敢」(sein Herze strebt so mutig)で、「目はいとも明るい」(sein Auge war so hell)。このような視覚的描写のあと、第42連では再び聴覚的な描写が続いて、「頭上の梢」(über sich im Wipfel)からは「愛らしい響き」(liebliche Schallen)、すなわち、「二羽の^{ナイチンゲール}小夜鳴鳥」(von zweien Nachtigallen)の「焦がれ泣く嘆き声」(Klagen und Girren)が聞こえてくるのであり、しかもジークフリートには、「心の中で、その声が分かるような気がした」(第43連)のである。ティークのロマンツェとしての特徴が最も顕著に表現されている箇所と言ってもよいであろう。

後半部分（第44－58連）においてはその「小鳥たちの声」が取り扱われており、しかもそれがすべて従来の伝統的なエピソードと結びつけられている。ま

ず第44連から第47連ではミーメルマイメーメルの悪企み（上記①のエピソード）が取り扱われていて、一羽のナイチンゲール小夜鳴鳥がジークフリートに「ミーメルの策略」（Mimer mit seinen Tücken）を知らせるとともに、ジークフリートの「偉大な行為」（ein Großes, 44）と「その愛らしい青春」（seine Jugend die liebliche, 47）をほめたたえている。そのあとの第48連から第51連にかけてはもう一羽の鳥がジークフリートに不死身の肌（③のエピソード）の秘密を教える。そこで若者は裸になって「湯気の立つ血の中」（in das rauchende Blut, 61）へ飛び込んで、「熱い慢心」（den heißen Übermut, 51）を冷やす。その竜の赤い血の中でジークフリートが小鳥から財宝（②のエピソード）のことを聞き知るのが、第52連から第55連においてである。「きらめく黄金」（das Gold, das schimmernde, 52）、すなわち、竜がとぐろを巻いて護っていた「きらめく宝石」（die Edelstein' die funkelnden, 54）は、やがてジークフリートの所有となる、と小鳥は知らせるのだが、今のジークフリートにはそれが意味するところを知らない。最後の第56-58連においては再び不死身の肌（③のエピソード）に戻って、ジークフリートが竜の血の中から元気よく出て来て、不死身の身体となったさまが語られている。しかし、いくら竜の血から「魔力」（den Zauber, 57）を勝ち得たとはいえ、気づかぬ間に菩提樹の葉が両肩間に落ちてきたため、そこが唯一の急所となって、のちに死ぬ運命きだめにあったのである。

以上のように見てくると、ティークのこの詩『竜殺しのジークフリート』の3)「小鳥たちの声」のエピソードにおいては従来語り継がれてきた前述の四つの件くだりのうち、ブリュンヒルトの存在（④のエピソード）を除けば、そのほかの件くだりはすべて取り扱われていることが理解できるであろう。しかもティークはそれらをただ伝統的に踏襲したのではなく、巧みに聴覚的・視覚的な自然描写を織り込むことによって自らのロマンツェとしての世界を展開させたのである。まさにここで展開されたティークの「小鳥たちの声」は、ループレヒト・ヴィンマーも指摘している³⁸⁾ ように、やがて『ニーベルングの指環』四部作を創り上げるリヒャルト・ヴァーグナーにも少なからず影響を与えたと推測してもよいであろう。ヴァーグナーは『指環』四部作のうち三作目にあたる楽劇『ジークフリート』第二幕において巧みに「小鳥の声」をその森の中に鳴り響かせている³⁹⁾ が、そこでは、ちょうどティークの詩とは逆に、不死身の肌（上記③の

38) Vgl. Ruprecht WIMMER: a.a.O., S. 723.

39) 三光長治・高辻知義・三宅幸男編訳：『ジークフリート』白水社1994年 127-33頁参照。

エピソード) が省略されている代わりに、ブリュンヒルデ (ブリュンヒルト) の存在 (上記④のエピソード) が取り入れられており、ヴァーグナーはこれによって「森のロマン主義」を展開させたのである。このヴァーグナーに影響を与えたという点でもティークは重要な役割を果たしたと言えよう。

以上、本稿ではティークの二つの詩を紹介し、その素材を確認するとともに、従来の伝承と比較することによってその特徴などを指摘してきたが、ここで結論として言えることは、ティークの二つの詩のうち『若き日のジークフリート』は従来の伝承を保存しただけにとどまっているが、『竜殺しのジークフリート』は明らかに伝統的なニーベルンゲン伝説の素材からかなり自由に詩作された、ロマン主義のメールヒェン的なバラードであり、ティーク自身が称しているように「抒情詩的物語詩」(Romanze) としての特徴を示しているということである。このロマンツェはヴァーグナーにも影響を与えたことは確かであり、ティークは1803年の著作によってグリム兄弟に影響を与えただけにとどまらず、こうして1804年には中世の英雄主義的素材をロマン主義的ロマンツェへと置き換えることによって、ニーベルンゲン伝説の復興に大きくて重要な役割を果たしたのである。